

廿八

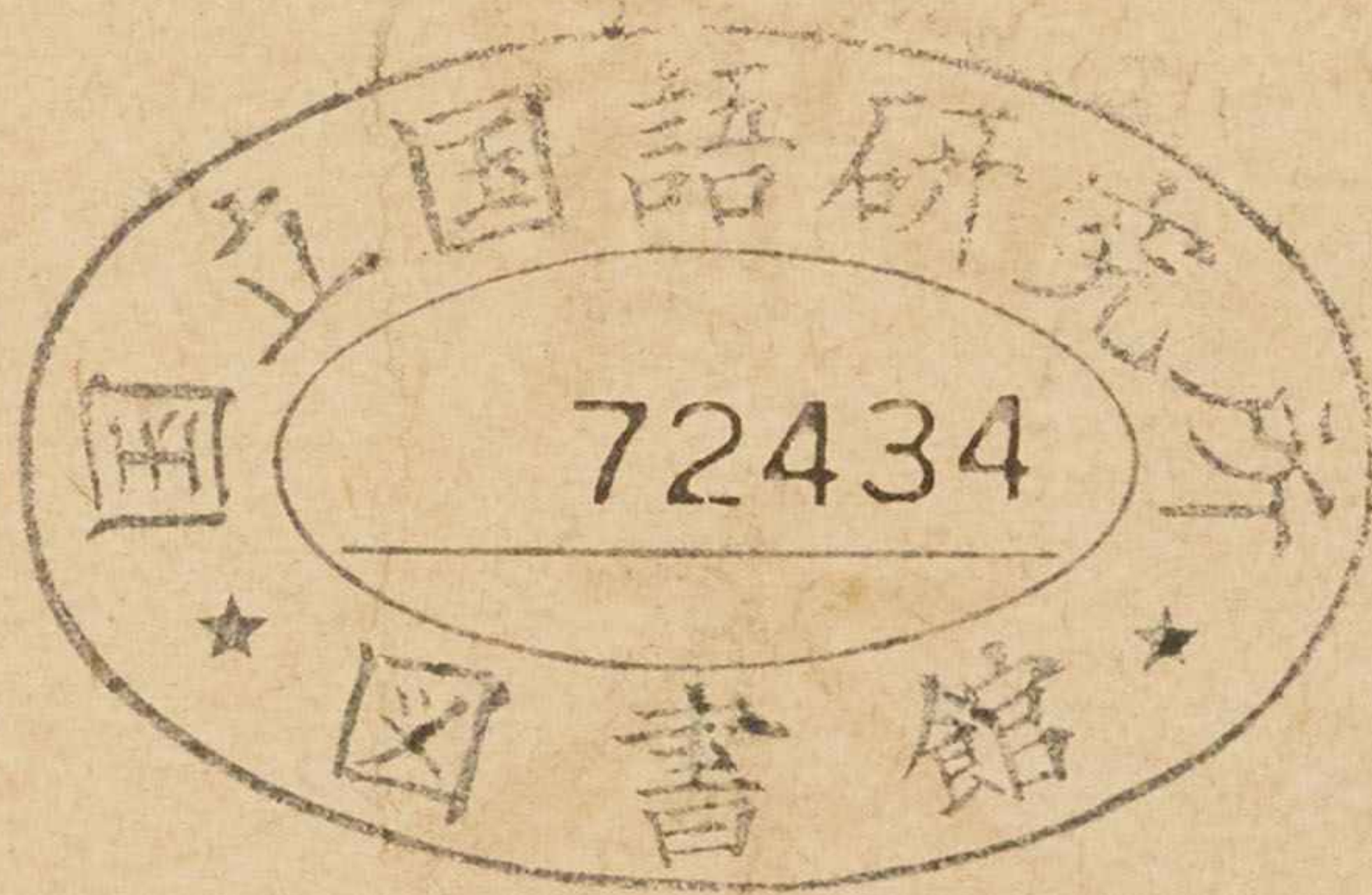
文部省著作

高等小學讀本  
七

發行所 日本書籍株式會社

K14

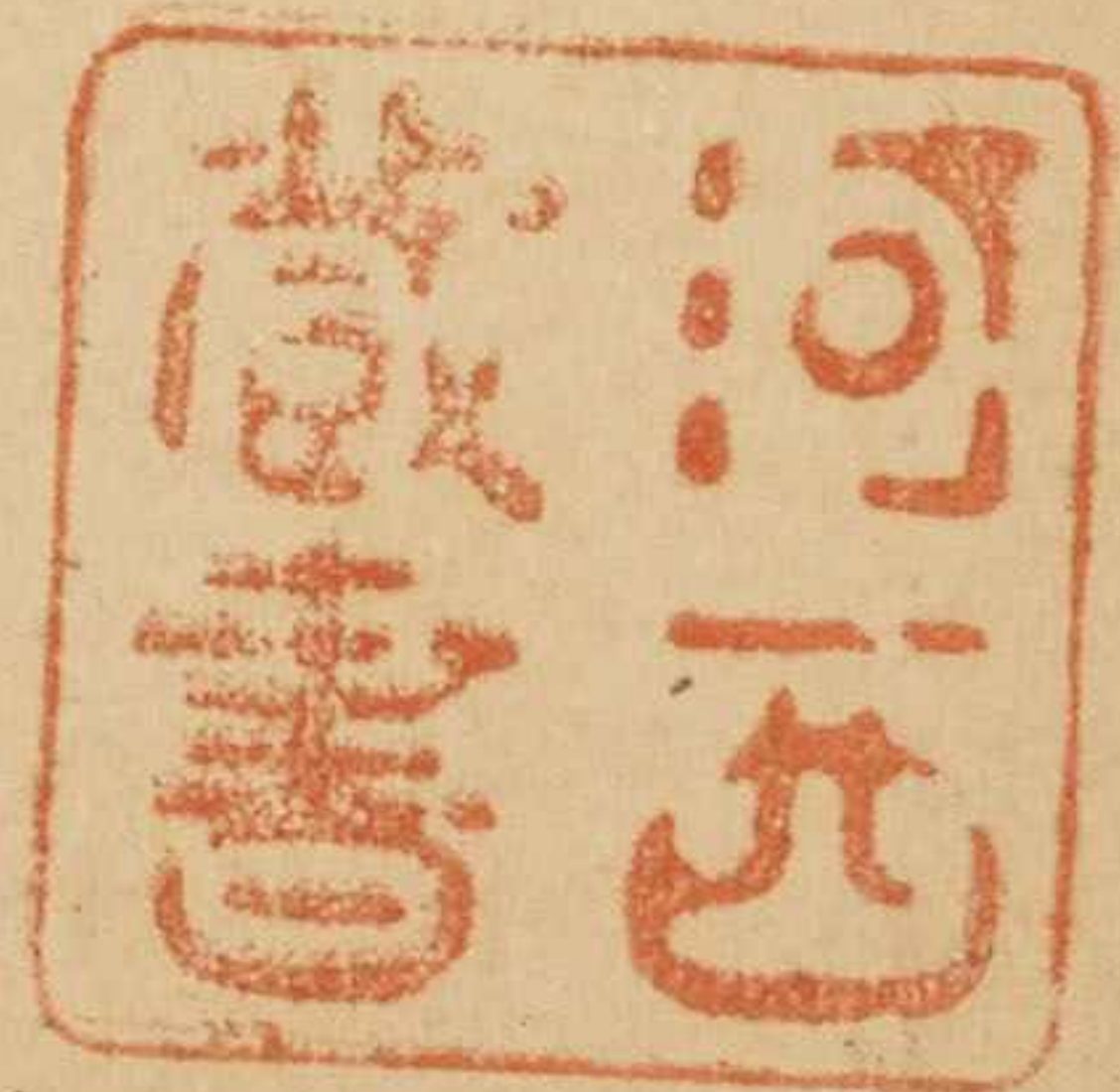
Mo



文部省著作

高等小學讀本  
七

發行所 日本書籍株式會社





第一課 文字。

言語は、思想を交換するに缺くべからざるものなれども、廣く、世間に通じ、永く、後世に傳へんには、文字を用ひざるべからず。われらは、文字によりて、前代の人の思想を究め、現時の人の思想を知り、さらに、これを次期の人に傳ふるがゆゑに、世は、層一層と、文明におもむくなり。文字は文明の要具といふべし。太古には、繩なはを種々の形に結びて、約束のしるしとしたりしことあり。今も、野蠻人ヤバンジンの中には、樹枝を切り、長短種種のものを作りて、通信、備忘のしるしとせるものあれども、これらはいまだ、文字とはいふべからず。文字は思

想を書きしるす符牒ふだにして、多數の人の承認ちんじせるものたるべし。

文字の、もつとも早く發明せられたるは、えじぶと、支那などなり。えじぶと、支那の古代文字は物にかたどりて作りたるものにして、あたかも畫のごとし。現今、文明國に

						支那古代文字
鳥	魚	水	山	月	日	
						エジプト古代文字
切ル	結ブ	飛ブ	涙	老人	トリコ	

行はるゝ文字は、みな、このいづれかの發達、變化したるものなり。文字を大別して、意字と音字との二つとす。意字は意味をうつすものにして、漢字のごときも

のをいふ。意字のうちには、物にかたどりて作りたる日、

鳥  
切ル

すものにして、漢字のごときも

のをいふ。意字のうちには、物にかたどりて作りたる日、

月、山、水、魚、鳥のごときものあり。

線の上、または下に、一點を附し

て、上、または下といふ意味を寓

し、左の手、または右の手をうつ

上	上	上	上	上
下	下	下	下	下
左	左	左	左	左
右	右	右	右	右

して、左、または右といふ意味を寓したるがごときもの

あり。また、木を、二つ合せて、林とし、三つ合せて、森とし、日

と月とを合せて、明とし、人と二とを合せて、仁としたる

がごときものあり。

音字は聲音をうつす文字にして、假名、ろーま字などの

ごときものをいふ。假名は、漢字より、ろーま字は、えじぶ

A	B	C	D	E	F	G
H	I	J	K	L	M	N
O	P	Q	R	S	T	U
V	W	X	Y	Z		

との文字より發達、變化したるものなり。

要するに、文字は思想を書きしるす符牒ふちやくなれば、學び易く、書きしるし易く、應用の自在なるをよしとす。漢字は、字數、およそ五萬ありて、字體、すこ

ぶる複雑ふくざんなり。假名は字數七十餘、ろゝま字は二十六字ありて、字體、はなはだ簡略かんりやくなり。音字の便は、はるかには、意字にまされりといふべし。

第二課 わが國の活版印刷術の起原。

わが國にては、奈良朝時代より、木版印刷術おこり、足利

時代には、すでに、活版印刷術も開けたりしが、その活字



わが國にては、奈良朝時代より、木版印刷術おこり、足利

時代には、すでに、活版印刷術も開けたりしが、その活字は、多くは木製にして、印刷精巧なるをえざりしゆゑにや、徳川時代の半頃なかばより、ほとんどすたれて、木版ひとり發達し、細密、精巧なる印刷物、ぞくぞく印刷せられたり。されど、一度、洋式の活版印刷術傳はりては、さすがの木版も、やうやくすたれて、今は、ほとんど、圖畫の印刷に用ひらるゝにすぎざるにいたれり。そもく、木版の印刷は、櫻、または、黄楊つげの板に、書畫を彫刻し、これを印刷するものなれば、書籍一部の紙數、百枚なるときは、版百面、千枚なるときは、版千面をおこさざるべからずして、その百面、千面の中に、同一の文字、幾回

あらはるとも、さらに、流用すべきみちなし。しかのみならず、版磨滅し易きがゆゑに、印刷の部數にも限あり。しかるに、洋式の活版印刷は、ふつゝ使用する文字を選びて、一字一字、あんちもに―と鉛との合金にて、活字を製しおき、印刷の際、その中にて、入用なる活字のみを拾ひ、これを組み合せて印刷するものなれば、印刷を終ふれば、解版して、さらに、幾回となく使用することをう。しかのみならず、よ―いに磨滅することなければ、印刷の部數にも、ほとんど、限あることなし。すなはち、木版印刷の、やうやくすたれて、洋式の活版印刷の盛になりたるは、自然の勢なりといふべし。

きて、かゝる便利なる、洋式の印刷術を、はじめて、わが國

自然の勢なりといふべし。

きて、かゝる便利なる、洋式の印刷術を、はじめ、わが國に傳へたるは本木昌造といふ人なり。

昌造は長崎の人、父祖の業をつぎて、おらんだ語の通辯たりき。ひろく、おらんだ語の書籍を讀むにつけて、その印刷の精巧なるに感じて、これをわが國に傳へんと思ひ立ち、あるひは、洋書により、あるひは、おらんだ人にただして、嘉永四五年の頃、流しこみ活字。といふものを造り、これを用ひて、おらんだ語通辯のことに關する一書を印刷せり。されど、活字といんきとの不完全なりしがために、印刷鮮明ならざりしかば、さらに、はがね、銅、水牛の角などを用ひて、工夫をこらし、が、なほ、意のごとく

なるをえざりき。

昌造は、萬延年間より明治維新の頃まで、長崎製鐵所につとめたりしが、明治二年、同志者とはかりて、長崎に、一の私塾を開きたり。しかるに、塾生の、しだいに増加するにつれ、入費も、非常にかきみたりしかば、その維持費をうる必要より、ふたゝび、活版印刷の業に、心をかたむくるにいたれり。

たましく、あめりか人、なにがしが、清國上海において、じぎいに、鉛製活字を鑄造するよし聞えければ、ただちに、人を遣して視察せしめしが、なにがしは、深く秘して教へざりき。あたかもよし。薩摩藩の儒者、なにがし、上海よ

り、活字を取り寄せ、印刷をこゝろみしかど、技術の未熟

へぎりき。あたかもよし。薩摩藩の儒者、なにがし、上海よ

り、活字を取り寄せ、印刷をこゝろみしかど、技術の未熟  
なりしがために、用をなきずして、むなしく、藏に藏せり  
と聞えしかば、人を介して購求し、これにならひて製造  
せしかど、なほ、十分なるをえぎりき。よりて、あめりか人、  
ふるべきにはかり、その紹介にて、上海の活版所に技師  
たりしものをまねき、活版傳習所を設けて、深く、活字鑄  
造のことを練習せしめたり。活字印刷は、こゝにはじめ  
て大成することをえたるなり。  
この活字鑄造術は、まもなく、東京に傳はり、後、諸方にも  
傳はりて、新聞、雜誌、書籍などは、ぞくぞく刊行せられ、ま  
た、古書も、しきりに翻刻せらるゝにいたれり。

昌造<sup>シヤウゾウ</sup>は、明治八年、五十二歳にて死せしが、活版印刷業の、  
今日のごとき盛況におもむけるは、ひとへに、昌造の力  
なればとて、同三十年、活版印刷業者、あひはかりて、大坂  
に、その銅像を建てたり。

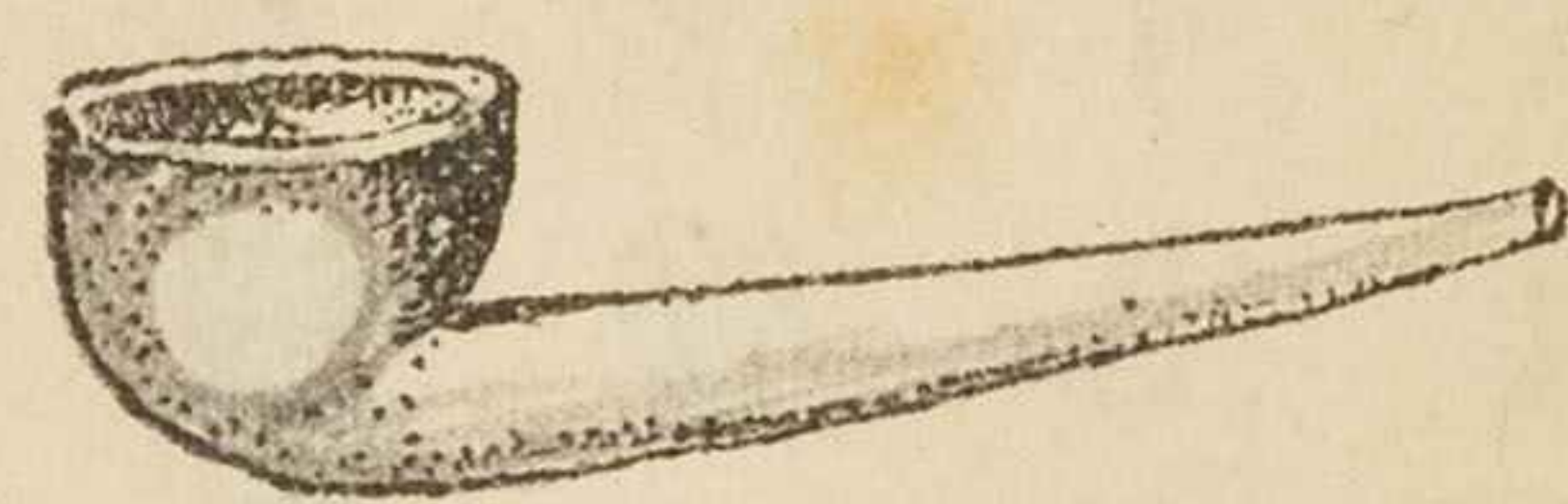
第三課 石炭がす。

諸子、もし東京、横濱などに到らば、夜、街路、または、室内に、  
瓦斯<sup>ガ</sup>燈<sup>ス</sup>の點ぜられたるを見るべし。瓦斯燈は、石炭を蒸  
焼にして、石炭がすを取り、これに火を點じたるものな  
り。

今、粘土<sup>カネド</sup>にて、圖のごときばいぶを作りて、その火皿の中  
に、石炭の細かき塊を入れ、粘土にて塞ぎて、火鉢の炭火

の上に置けば、しばらくして、吸口より、臭き煙出

に、石炭の細かき塊を入れ、粘土にて塞ぎて、火鉢の炭火



の上に置けば、しばらくして、吸口より、臭き煙出  
づ。これに、板を觸るれば、黒きやにつき、火を點ず  
れば、煙多き焰をあぐ。やゝ久しくして、火皿赤く  
なれば、もはや、煙出でざるにいたる。この時、また、  
火を點ずれば、このたびは、煙なき焰をあぐ。かの瓦斯燈  
に用ふる石炭がすはこの煙なきがすに近くして、大仕  
掛の器械にて精製したるものなり。

石炭がすを、大仕掛の器械にて精製するには、まづ、竈と  
れとるととを要す。竈は、煉瓦にてきづきたるものにし  
て、ききの實驗に用ひたる火鉢にあたり、れとるとは、粘  
土にて造りたる、かまぼこ形のものにして、ばいぶの火

皿にあたる。いま、れとるとに石炭をつめて、これを塞ぎ、  
 竈に、火を焚きて熱するときには、石炭より、がす生ずべし。  
 されど、このがすは、さきの實驗に、ばいぶの吸口より出  
 でたる煙のごとく、多量のこゝるたゝるといふ、黒きや  
 に、その他、種々のものを含みて、火を點ずれば、煙多き焰  
 をあぐるがゆゑに、これらのものを取り除かざるべか  
 らず。すなはち、このがすを、れとるとの一端より出でた  
 る鐵管を通じて、竈の上に横たはりたる水管に導く。  
 水管は、水を、なかば半充てたる鐵管にして、れとるとの一端よ  
 り出でたる鐵管、口を、その水中に開けるがゆゑに、鐵管  
 を通じて導きたるがすは、その中に含めるこゝるたゝ

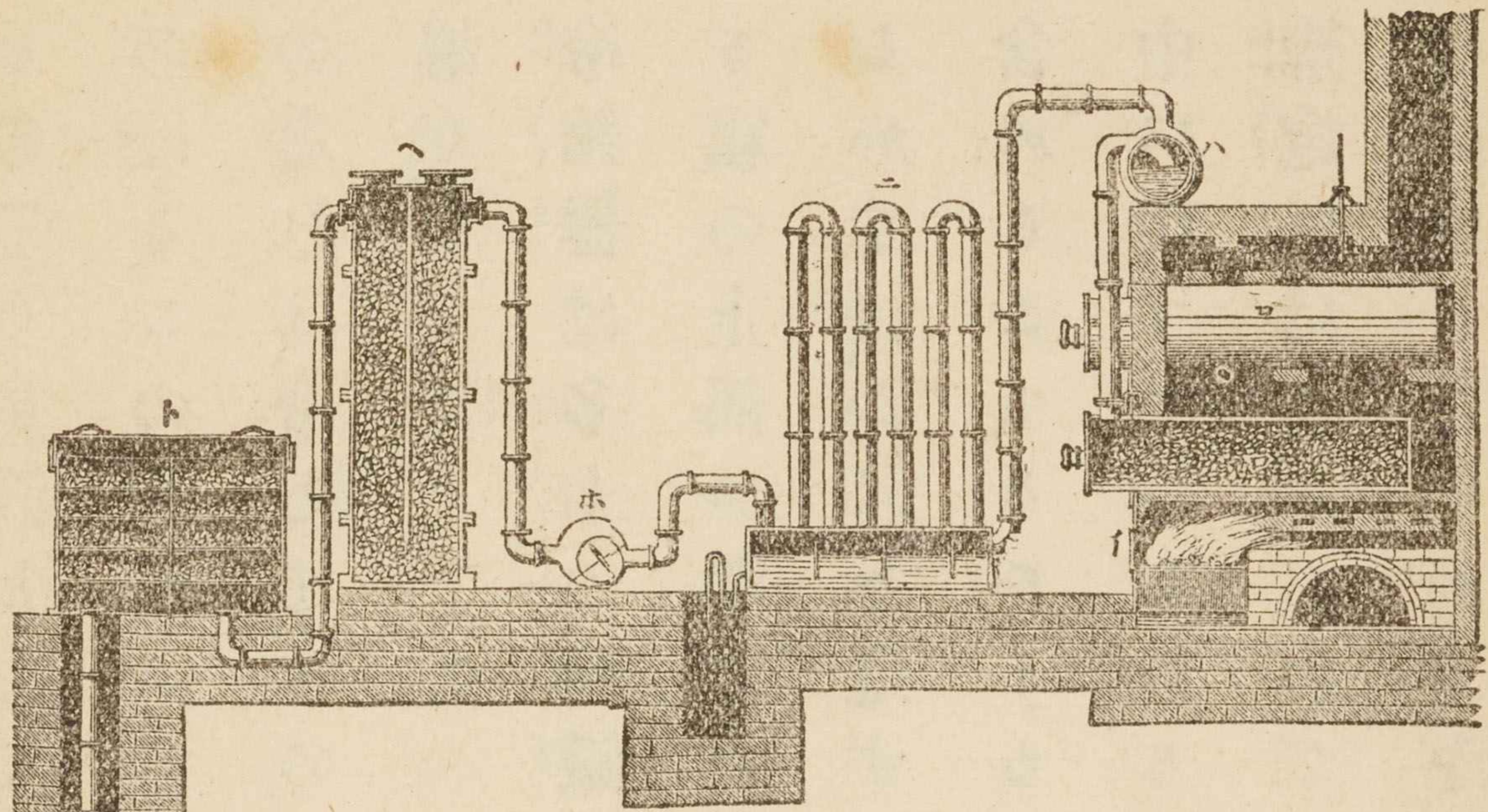
るの多くを、液として、こゝに残し、泡をたてつゝ、水面に



を通じて導きたるがすは、その中に含めるこゝるた

るの多くを、液として、こゝに残し、泡をたてつゝ、水面にのぼる。この、水面にのぼりたるがすは、はなはだ熱きものなれば、冷して、その容積を縮めんがために、冷縮器に導く。

冷縮器は多くの、蹄鐵形の鐵管、その口を、水を、半充てたる箱の上部に開きたるものにして、水管より導かれたるがすは、これを通ずる間に、じゝぶんに冷え、その中に含めるこゝるたゝる、あんもにやなどを、液として、水中に残す。かくしたるがすは、排送器に導く。排送器は、ぼんぶのごとき仕掛にして、かのれとるとの、中に生じたるがすを、水管と冷縮器とを通じて、ほどよ



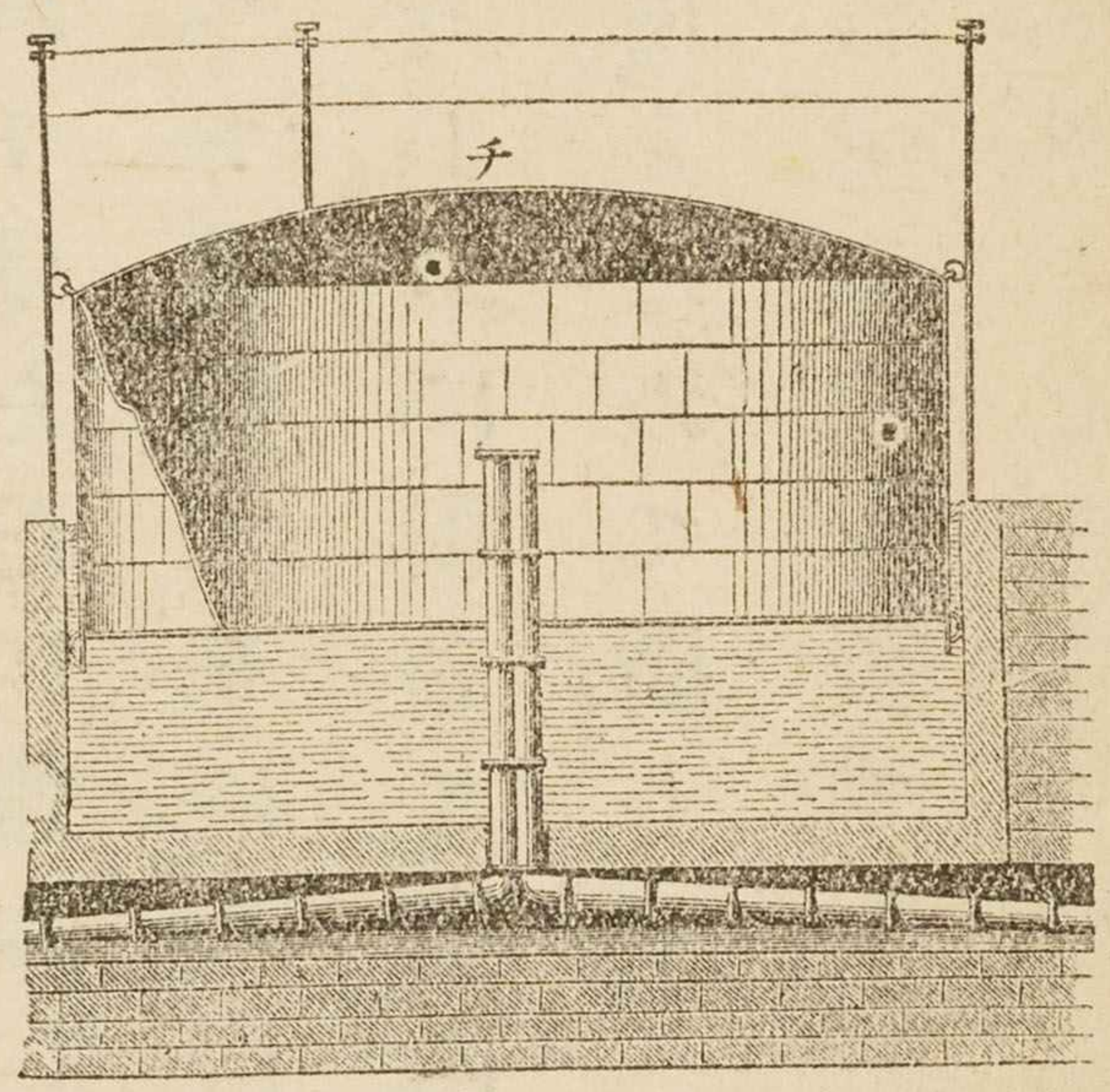
イ かまど  
 ロ れとると  
 ハ 水 管  
 ニ 冷 縮 器  
 ホ 排 送 器  
 ト 洗 淨 器  
 チ 瓦 斯 溜

く吸ひ出すものなり。この排送器を通じたるがすは、なほ、少量のこーるたーると、あんにや、炭酸がす、硫黄<sup>いわう</sup>などを含めば、これらのものを取り除かんがために、さらに、洗淨器<sup>せんじょうき</sup>と清淨器<sup>せいじょうき</sup>とに導く。

洗淨器<sup>せんじょうき</sup>は高き、鐵の筒にして、中央に、しきりをつ

けて、水に濕へるこーく

して、中央に、しきりをつ



たるがすは、洗淨器を通ずる間に、かのこーくすのため  
に、その中に含めるこーるたーる、あんもにやなどを吸  
ひ取られ、また、清淨器を通ずる間に、かの薬品のために、  
炭酸がす、硫黄<sup>いわう</sup>などを吸ひ取らる。この清淨器を通じた  
るがすは、すなはち、かの瓦斯<sup>がす</sup>燈に用ひらる、石炭がす

けて、水に濕へるこーく  
すを充て、清淨器<sup>せいじよき</sup>は方形  
の、鐵の箱にして、中にあ  
る、多くの棚<sup>たな</sup>に、石灰、その  
他の薬品を載せたるも  
のなり。排送器<sup>はいそうき</sup>より導き

なり。

されど、瓦斯燈の點ぜらるゝは夜にして、また、夜によりて、石炭がすの消費高に、多少あるがゆゑに、朝より夜にかけて製する石炭がすは、いちおし、これを瓦斯溜に溜め、日暮にいたりて、鐵管より、市中に送り出すなり。

石炭がすは、ただに、燈火に用ふるのみならず、また、薪炭にかへて、煮焚するにも、汽罐に引きて、湯を沸すにも用ひ、すといぶに引きて、室内をあたゝむるに用ふるなど、その用、きはめて廣し。

また、石炭がすを製する時、れとるとに残るこゝくすはよき燃料となり、水管、冷縮器などに残るこゝるたりる

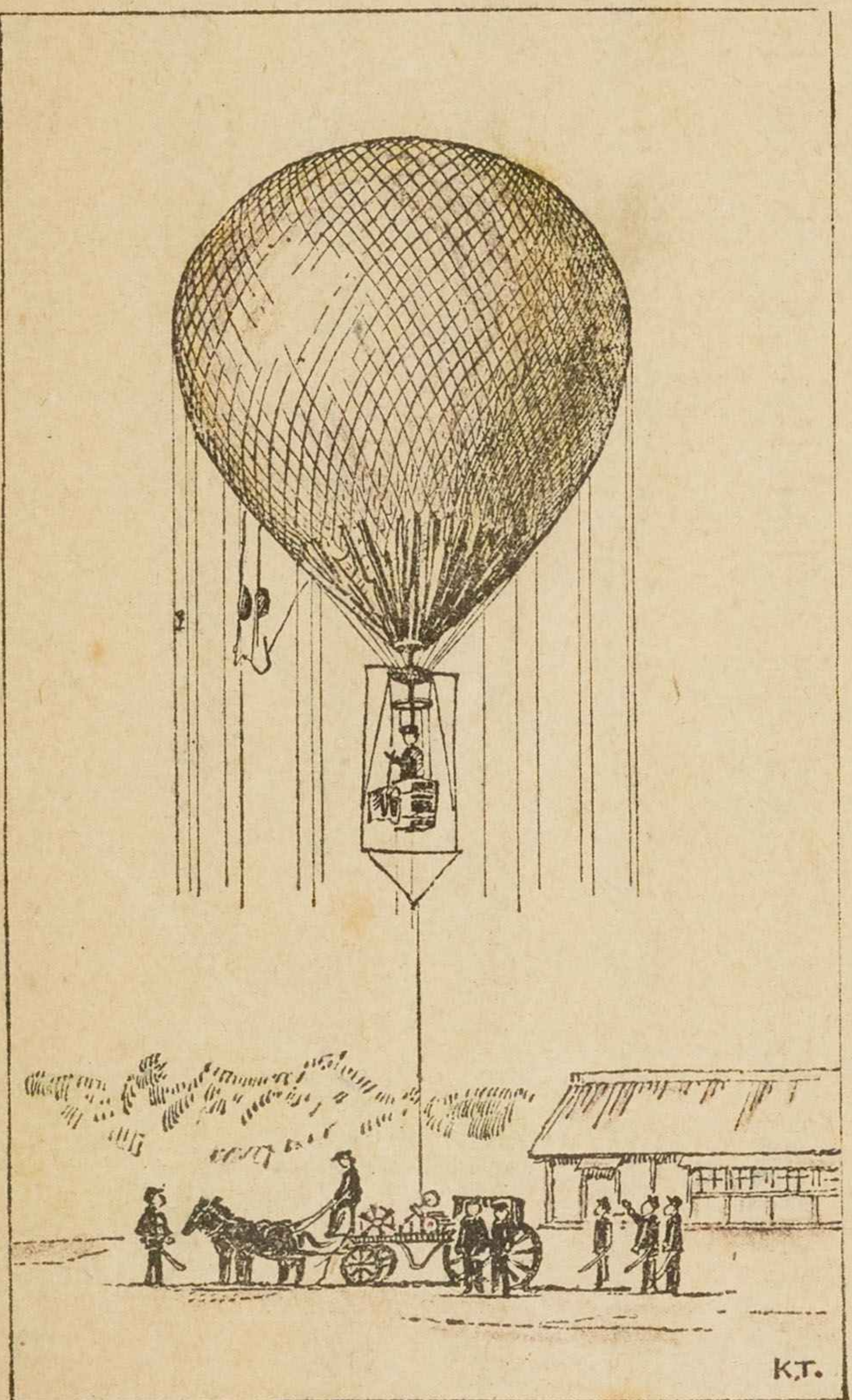
は種々の藥品、染料となるなり。

よき燃料ねんりょうとなり、水管、冷縮器れいしゆくきなどに残るこゝるたゝる

は種々の藥品、染料となるなり。

第四課 輕氣球。

水ヲ入レタルコップノ中ニコルクヲ投ズルトキハ、コルクハ、オノヅカラ、水面ニ浮ブベシ。マタ、ソノコルクニ小サキ釘クギヲツルシテ投ズルトキハ、コルクハソノ釘ヲヒ



キツ、オモムロニ、水面ニ浮ビ出ヅベシ。カク、コルクノ、水面ニ浮ブハ、コルクノ、水ヨリモ輕キガユエ

ナリ。輕氣球ノ、空中ニ飛揚スルモ、コノ理ニホカナラズ。輕氣球ハ、薄キ絹ニテ製シタル、大イナル囊フクロニ、ニカハ、マ  
 タハ、ゴムノ類ヲ塗リテ、ヌノメヲ塞ギ、中ニ、水素ガス、マ  
 タハ、石炭ガスヲ充シ、外部ヲ、輕キ網ニテオホヒ、ソノ下  
 端ニ、籃カゴヲ結ビツケタルモノナリ。籃ハ人ノ乗ルトコロ  
 ニシテ、オホムネ、藤蔓フヂヅルニテ製ス。マタ、囊ノカタハラニハ、  
 大イナル、布ノ傘ヲカクルコトアリ。  
 ソモく、水素ガス、石炭ガスハ、ソノ重サ、空氣ニ比シテ、  
 ハルカニ輕キモノナレバ、コレヲ充セル輕氣球ハ、アタ  
 カモ、釘クギヲツルシタルコルクノ、水面ニ浮ビ出ヅルガゴ  
 トク、ヨク、空中ニ飛揚スルコトヲウルナリ。シカシテ、飛

揚セルモノヲオロサントスルトキニハ、綱ヲ引キテ、囊フクロ

トク、ヨク、空中ニ飛揚スルコトヲウルナリ。シカシテ、飛

揚セルモノヲオロサントスルトキニハ、綱ヲ引キテ、囊<sup>フクロ</sup>  
ノ上部ニマウケタル瓣<sup>ベン</sup>ヲ開キ、囊ノ中ノガスヲ逸出セ  
シム。マタ、布ノ傘アルモノハ、同時ニ、コレヲ開ク。コレ、コ  
レニ風ヲフクマセテ、オモムロニオリンガタメナリ。  
輕氣球ハ、今ヨリ、オヨソ百二十年前、フランス人、モン  
トル<sup>モン</sup>フイエー兄弟ノ、ハジメテ發明セシモノナリ。サレド、  
ハジメハ、紙、絹ナドニテ造リタル囊<sup>フクロ</sup>ニ、タダ、熱シタル空  
氣ヲ入レテ飛揚セシムルモノナリシガ、マモナク、水素  
ガスヲ用ヒ、ツヒニ、石炭ガスヲモ用フルニイタリ、カツ、  
ソノ装置モ、種々改良セラレテ、タダニ、乘リテ上下スル  
コトヲウルノミナラズ、マタ、進路ヲモ、自由自在ニ變ズ

ルコトラウルニイタレリ。

輕氣球ハ、遊戯ニモ用フレドモ、シバく、氣象ノ觀測ニモ用ヒ、マタ、軍事ニモ用フルコトアリ。今ヨリ三十餘年前、フランストプロシヤトノ戰アリシ時、フランスノ首府、パリ―ハ敵ノ軍勢ノタメニ圍マレテ、内外ノ交通トダエケレバ、フランス軍ハ數十ノ輕氣球ヲ造リ、使者ヲノセテ、ソノ交通ヲハカリキトイフ。

第五課 輕氣球に乗った子どものお話。(一)

ある時、三人の子どもが、父につれられて、輕氣球を見に行つた。はじめ「のらちちは、こはいものだ。」と思つて見てゐたが、人が、そのかご籃に乗つて、高く、家の上の方まで上り、それにつ

ないである綱をたぐつてもらつて、おりてくるのを見ては、



人が、その籃かごに乗って、高く、家の上の方まで上り、それにつ

ないである綱をたぐってもらって、おりてくるのを見ては、「こはい。」と思ふ心は、どこへか行ってしまつて、「ひとつ乗ってみたいものだ。」と思ふよーになつた。

父は、三人をその籃かごにのせてやつた。さいしよにのせたのはふんにーといふ、十歳の女ものの子、次ははりーといふ、七歳の男の子、次はめーといふ、まだ、西東もわからない女の子であつた。

輕氣球は、三人をのせて、だんく上つて行つた。そして、それにつないである綱なわのありたけ上つたとき、どうしたはずみか、その綱が、ふつと切れた。輕氣球は、いよく高く上つて行く。

下に居る人々は、大聲を出して叫んだ。ふんにーとはりーとは、おそるく、かご籃のふちからのぞいて見て、はじめ、綱の切れたことを知った。また、父の何か、しきりにいってゐるのも聞いた。しかし、もう、そのことばを聞きとることはできなかつた。

きても、不思議。輕氣球は、同じ所にとまって動かないのに、地面は、下へ下へと遠のいて、すべてのものは、だんく、小さく見える。はては、人や木や家は、おもちのよーに、小さく見え、川は、ぎんし銀糸のよーに、細く見える。ふんにーとはりーとは、めまひがして、心持がわるいので、かご籃の底にひっこんで、ともに、めーを抱きかゝへた。

かご籃は動搖しはじめ、三人は、今にも落されさうである。

で、籃かごの底にひっこんで、ともに、めーを抱きかゝへた。

籃かごは動揺しはじめ、三人は、今にも落されさうである。三人は、たがひに抱き合つて、聲をたてゝ泣く。ことに、めーは、「おかあさん。く。」と、泣きつづける。

今までかがやいてゐた太陽は、もう隠れてしまつて、むかふの雲の間に、星は、二つ三つ光つてゐる。

しばらくして、籃かごの動揺はやんで、ふんにーも、はりーも泣きやんだ。めーも機嫌きげんをなほした。ふんにーは、ぼけつとに、ばんのあることを思ひ出して、それを出して、分けて食べた。めーは、小さい聲で、兄のはりーに向つて、「にいさん。いまに、あのお星様の所に着きませうね。そしたら、お星様を拾つて、おかあさんのお土産みやげにしませうや。」といふ。す

ると、はりーは「もう、おかあさんの所へ歸ることはできないんだ。」といふ。めーは、またも泣き出した。

ふんにーは、いろくくと慰めて、「あしたになると、きっと、この輕氣球はおります。そしたら、よそのをばさんのうちをたづねて、御飯をごちそーになつて、そして、うちへ歸る途をたづねませう。」といつて、じぶんの着物をめーにまきつけて寝た。はりーも、ふんにーの側にすりよつて寝た。はりーとめーとは、すぐ眠つてしまつた。しかし、ふんにーは、からだは寒く、頭は痛くて、なか／＼、眠ることができなかつた。「おとうさん、おかあさんは、どんなに心配してゐらう。しるだらう。」と思つたり、「この末はどうなるだらう。」と思つたり

して、ますます、眠ることができなかつたが、いつのまにか

るだらう。」と思つたり、「この末はどうなるだらう。」と思つたりして、ますます、眠ることができなかつたが、いつのまにか眠つてしまつた。

第六課 輕氣球に乗つた子どもの話。(二)

あくる朝、ふんにーは、目をさまして、「じぶんはどこに居るのだらう。」と思つたが、ほどなく、きのふからの事を思ひ出した。この時、太陽はすでに上つてゐて、輕氣球を照し、ふんにーの顔を照し、また、すやくと眠つてゐるはりー、めーの顔を照してゐる。

ふんにーは、「もう、すこしは、下の方におりたらう。」と思つて、<sup>かご</sup>籃のふちからのぞいて見たが、恐れて、震へて、もとの座にすくんだ。地面は、もう、全く見えなくなつてゐるのであ

る。しばらくして、ふんにーは、またのぞいて、長い間見おろしてゐたが、「あー。あれは雲だ。私らは、雲の上に居るのだ。あー。どうしたらよからう。」と、しくくと泣き出した。そのうちに、ふと、球の中ほどこからさがつてゐる、小さい綱が目についた。ふんにーは、何氣なしに起きあがって、これを引いてみた。すると、しばらくして、濃い霧がおこつて、太陽も見えず、頭の上の球さへ見えないよーになつた。ふんにーはびくりにして、ぶる／＼震へて、また、もとの座にすくんだ。

しかし、その、濃い霧と見えたのは、じつは、さきに、ふんにーの見た雲であつたのである。ふんにーが綱を引いたた

めに、球の瓣べんが開いて、中のがすがもれて出たので、輕氣

ーの見た雲であつたのである。ふんにーが綱を引いたた  
めに、球の瓣べんが開いて、中のがすがもれて出たので、輕氣  
球はずんく〜とおりかけて、さきに、ふんにーの見た雲  
の中にはいたのである。今や、それをも通り越して、いよ  
いよ、下へおりてくる。

その時、ふんにーは、また、籃かごのふちからのぞいて見たと  
ころが、こんどは、下に、緑色の地面が見えたので、こをど  
りして喜んだ。

輕氣球は、同じ所にとまてゐるのに、こんどは、地面が、上  
へ上へと上つてくる。おもちのよーに見えた家や木や人  
は、しだいに、大きく見えてくる。銀糸ぎんしのよーに見えた川  
も、廣く見えてくる。

輕氣球は、ある、小さい町の上に来た。ふんにーは、人々の、わい／＼きわぐ聲を聞いた。また、人々の、あちこちと走りまはるのをも見た。そして、「あの人たちはこの輕氣球を見つけたのだな。」と思って、大いに喜んだ。

ふんにーは、寝てゐるはりーと、めーとを起して、その事を話した。はりーとめーとは、大いに喜んで、き／＼／＼ときわいで、それを見ようとする。籃かごは、いまにもひ／＼くりかへりさう。ふんにーは、や／＼このことで、それをとめた。

これよりさき、子どもらの父は、國內の各所に、電報をうて、「もしも、輕氣球が見つかったら、すぐさま知らせてください。よろしく。」と頼んでおいた。それで、この町の人々も、長い

間、空の方に注意してゐたのであるが、輕氣球が見つかった。



るよーに。」と頼んでおいた。それで、この町の人々も、長い間、空の方に注意してゐたのであるが、輕氣球が見つかったので、すぐさま、父の所へ電報をうった。

輕氣球は、下へ下へとおりてくる。町の人々は「もしや、どんと落ちて、子どもがみじんになるよーなことはあるまいか。」と心配してゐたが、しあはせにも、屋根の上を通り越して、町の近所の畑の中に落ちた。

しばらくして、父母は、急行列車で、この町に着いた。あー。親子の、あひ逢ったときの喜はどんなであらう。

### 第七課 地殻の變動。

地球は、はじめより、今日のごとき状態をなせるものにはあらず、もとは、非常に熱き、一團のがす體なりしが、そ

のがす體、しだいに、熱を失ひて、液體となり、つづいて、その表面に、固體の地殼を作るにいたれり。しかして、地殼は、地球の、なほつづいて、熱を失ひて收縮せるがために、つひに、皺しわを生じて、皺の高き所は陸となり、低き所は、水溜りて、海となり、陸にも、山川、平野などの別を生ずるにいたれり。

かく、地球は陸と海との別を生じ、陸に、山川、平野などの別を生ずるにいたりたれども、今日のごとき状態をなすまでには、なほ、幾多の變動をへたりしなり。その變動のおこりたるは、一は、地球の内部より發せる力により、一は、外部より來れる力にもとづく。

地球の内部よりおこりたる變動は、みな、地熱の作用に

一は、外部より來れる力にもとづく。

地球の内部よりおこりたる變動は、みな、地熱の作用による。そもく、地球は、はじめ、地殼に皺しわを生じたる後、たえず、地熱を放散して、冷却し、收縮するものなるがゆゑに、しばく、地殼の隆起リキ、陷没かんぼつをおこしたり。わが國の太平洋海岸には、海底の隆起したるあと多く、日本海海岸には、陸地陷没して、海水のひたしたるあと多し。

また、しばく、地殼に裂目を生じ、内部の熔岩トキ、この裂目よりほどばしり出でて、多くの火山を作りたり。富士山、淺間山あさま、阿蘇山あそ、霧島山きりしまなどは、みな、かくして成れる火山なり。

また、火山の破裂せしこと、じすべりの生ぜしことなど

は、しばく、地球の表面に、大變動をおこしたり。明治二十一年の磐梯山ばんたいさんの破裂せしときには、小磐梯山を、全く破壊し、その破裂のために飛散せし岩片は、河水をせきとめて、數箇の湖を作りたり。また、明治二十四年の濃尾のうび大地震の原因となりしじすべりは、長さ十萬メートルに達し、上下地盤の差六メートルに及びたりといふ。次に、外部よりおこりたる變動は、主として、空氣、水、生物の作用による。

空氣は、溫度の變化によりて、岩石をもろくし、くづれやすくし、風となりては、沙漠、海岸の砂を吹きあげて、しばしば、砂のをかを作りたり。下總の九十九里濱、常陸の鹿か

島灘しまなだに沿へる海岸などには、この砂のをかの例多し。

しば、砂のをかを作りたり。下總の九十九里濱、常陸の鹿

島灘しまなだに沿へる海岸などには、この砂のをかの例多し。

河水は、その上流にありては、底の傾斜急にして、その勢はなはだ烈しきがゆゑに、大いに底と兩岸とを侵蝕しんしよくし、またよく、巨大なる岩石を轉じて、ますく、これを侵蝕し、つひには、深谷を作りたり。

されど、河水は、山岳を出で、平野を過ぎて、河口に來れば、こゝに、上流より運び來れる土砂を、ことに多く沈めて、しばく、新しき土地を作りたり。大坂市の大部分は、じつに、この新しき土地に開けたるものなり。

また、海水は、海岸において、烈しき波濤はとうをおこし、岩石の裂目に、非常なる勢にて侵入し、また、岩片とともに、砲彈ほうだん

の胸壁をくづすがごとき作用をなして、しばく、岩石を破壊し、はなはだしきは大きいなる岩窟がんくつを作りたり。相模の江の島の岩窟は、かくして成りたるものなり。また、陸前の松島のごときも、波濤の力によりて成れるにほかならず。

また、雨水の力もあなどるべからずして、つねに、地面を洗ひ去り、また、多く、岩石の柔軟じゅうなん、粗鬆そしやうなる部分を破壊したり。上野の妙義山の石門などは、雨水の力によりて成れるものなり。

生物も、地殻の變動に、あづかりて功あるものなり。かの珊瑚礁さんごしょうのごときはその一例なり。

地球は、じつにかゝる作用のために、しばく、變動をお

珊瑚礁のごときはその一例なり。

地球はじつにかゝる作用のためには、しばく、變動をおこして、つひに、今日のごとき状態をなすにいたれるなり。しかも、その作用は、未來永劫までも續くべきものなるがゆゑに、數千萬年の後において、今日の地圖を見たらん人は、かならず、その變動のはなはだしきに、大いに驚くことなるべし。

第八課 強者、強國。

強者存して、弱者滅び、

強國榮えて、弱國衰ふ。

天地開けし、その時、このかた、

たれか、いづこか、この理にはづれし。」

身體強くて、わづらひ知らず。

意志、また強くて、目的しおほす。

これぞ強者ぞ。強者ははだの

白きと、黄なるにかゝはるものかは。」

國民、あひ和し、實業榮え、

兵備たらひて、國威かがやく。

これぞ強國。強國は位置の

西と、東にかゝはるものかは。」

強者存して、弱者滅び、

強國榮えて、弱國衰ふ。

いでや。人々。強者となれや。

なりて、この國強からしめよや。」



いでや。人々。

強者となれや。

なりて、この國

強からしめよや。」

第九課 動物の進化。

諺に、「<sup>ことわざ</sup>瓜の蔓<sup>つる</sup>に、<sup>なす</sup>茄子はならぬ。」といふことのあるがごとく、動物もその形質を、かならず、その子に傳ふるものなり。されど、子の形質の親と、全く同じきことは、はなはだまれにして、多くは、外界の境遇に應じて變化するがゆゑに、多少異なるところあるをつねとす。されば、動物は、ぜんじに、變化を重ねて、長き年月の後には、その祖先と、大いに異なる形質を有するにいたるものなり。現時生存せる動物の種屬は、すべて、ある祖先より出でて、變化を重ねたるものにほかならず。

さて、動物が、外界の境遇に應じて、形質を變化すること  
は、人の飼養するものにおいて、もとも明かに見ることを  
得べし。

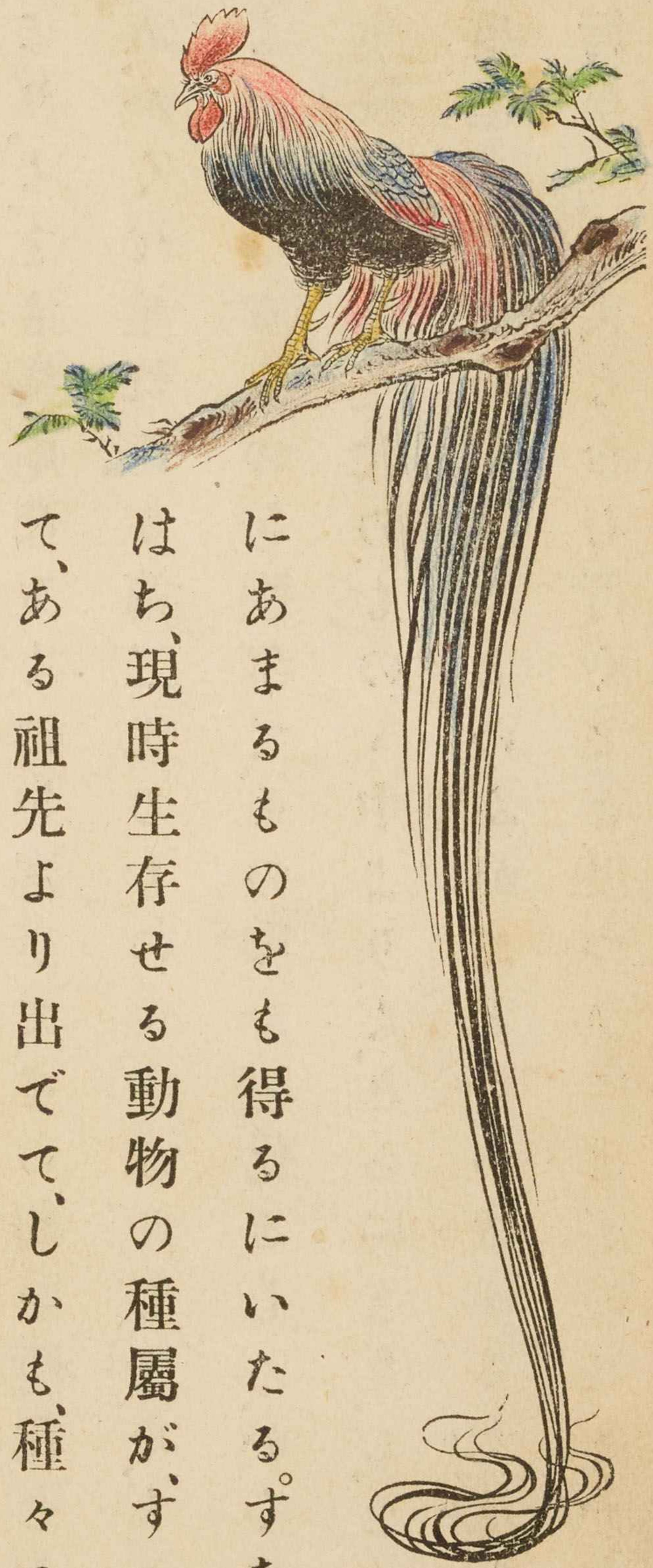
現今飼養せらるゝ金魚には、まるこ、わきん、りーきんな  
どあり、鶏には、くきん、ちぼ、さぎなみなどあり、また、犬に  
は、洋犬、和犬などあり。その形態の上にも、性質の上にも、  
おのゝく、特徴ありて、同じ原種より出でたるものとは、  
ほとんど想像すべからず。されど、金魚は、もとは、支那よ  
り傳はりたる鮒ふなの一種にして、鶏は、じば島に産したる  
野や鶏けいなりしなり。また、犬は、その原種の、いづこより傳は  
りたるか、明ならざれども、ある説によれば、もとは狼おほかみな

りきといふ。しかも、これらが、その原種と、かくも異なる

りたるか、明ならざれども、ある説によれば、もとは狼おほかみな

りきといふ。しかも、これらが、その原種と、かくも異なる形質を有するにいたれるは、全く、人の飼養したるにより、たがひの間にも、異なる形質を有するにいたれるはその飼養の方法の異なるによるなり。

こゝに、人あり。よきさぎなみを得んとし、さぎなみの中より、もつとも長尾なるものを選びて、その卵を孵ふ化かせしめ、かくて生れたる第二代のもの、中より、もつとも長尾なるものを選びて、その卵を孵化せしめ、かくて生れたる第三代のもの、中より、もつとも長尾なるものを選び、いふがごとく、いはゆる淘汰といたを行ひて、幾代もおし行くときは、つひには、尾の長さ一丈



にあまるものをも得るにいたる。すなはち、現時生存せる動物の種屬がすべて、ある祖先より出でて、しかも種々の形質を有するにいたれるは、全く、その淘汰の方法の異なるによるなり。

されど、こゝに、一つの問題あり。人の飼養する動物には、人によりて、淘汰<sup>たいた</sup>行はる。人の飼養せざる動物にも、かゝる淘汰行はるゝか。

そもく、動物の數は、非常におびただしくして、かつ、年

る淘汰行はるゝか。」

そもく、動物の數は、非常におびただしくして、かつ、年  
年蕃殖し行くものなるがゆゑに、と一てい、ことごとく  
は、地球上に生存することあたはず。されば、動物は、たが  
ひに競争して、おのれの生存せんことをはかる。これを  
生存競争といふ。生存競争においては、強者、すなはち、お  
のれの生活する情況に適せるものは、つねに生存し、弱  
者、すなはち、これに適せざるものは、つねに滅亡す。しか  
して、生存者、すでに強者なれば、その子も親の形質を傳  
へ受けて、また強者たるべし。されど、次の時代には、その  
強者、また、生存競争によりて淘汰せらるゝがゆゑに、強  
者中の強者は生存し、弱者は滅亡すべし。かくて、しだい

に淘汰せられ行くときは、つひには、動物の形質に、いち  
 じるしき變化を生ずるにいたる。

こゝに、一つの蝶ちやあり。樹木にとまれるとき、その翅はねすこ  
 しにても、木の葉に似たるところあれば、他の蝶よりも、  
 鳥の注意をひくこと少く、したがって、餌となることも少  
 くして、安全に生存し、産卵することをうべし。しかして、  
 その卵より孵ふ化かしたる蝶は、親の形質を傳へ受けて、ま  
 た、多少、木の葉に似たるところあるべし。されど、この二  
 代のものも、生存競争によりて淘汰たせらるゝがゆゑに、  
 その中にても、もともよく、木の葉に似たるもの生存して、  
 産卵すべし。かのこのはちちは、かくて、數代を経て、つひ

に、全く、木の葉とまがふがごとくなるにいたれるもの

産卵すべし。かのこのはあーは、かくて、數代を経て、つひ

に、全く、木の葉とまがふがごとくなるにいたれるものなり。すなはち、人の飼養せざる動物にも、生存競争によりて、淘汰の行はるゝことを知るべし。

以上述べたるところによりて、動物は、古より、一定の形質を有するにはあらずして、外界の境遇に應じて、ぜんじに、形質を變化するものなることを推察すべし。この、外界の境遇に應じ、形質を變化して、おのれの生活する情況に適するにいたることを進化といふ。進化の理を、深く究め、かつ、くはしく説明したる人は、だーうんなり。だーうんは、今より二十餘年前に死にたる、いざりすの博物學者なり。

第十課 バクテリヤ。

バクテリヤハ、キハメテ微細ナル菌類ニシテ、顯微鏡ニテ廓大スルニアラザレバ、見ルコトヲ得ズ。ソノ、モットモ微細ナルモノハ、數千倍ニ廓大シテ、ハジメテ見ルコトヲ得。モシ、人體ヲ、コノ割合ニ廓大セバ、ソノ容積、富士山ヨリモ、サラニ大イナルニイタルベシ。

バクテリヤハ、ホトンド到ル所ニ生存スレドモ、コトニ、塵埃、汚水、腐敗物ナドニ多シ。球狀ノモノアリ、圓柱狀ノモノアリ、螺旋狀、マタハ、線狀ノモノナドアリテ、形一樣ナラズ。

バクテリヤハ、オホムネ、自體ノ分裂ニヨリテ繁殖ス。ス

ナハチ、ソノ體一定ノ大サニ達スルトキハ、中央部、マツ、



バクテリヤハ、オホムネ、自體ノ分裂ニヨリテ繁殖ス。ス

ナハチ、ソノ體一定ノ大サニ達スルトキハ、中央部、マツ、少シククビレ、シダイニ細クナリ、ツヒニ分レテ、二箇トナルナリ。カクテ、オノノ成長シテ、原形トナレバ、マタ、同様ニ分裂スルガユエニ、ソノ繁殖ノ神速ナルコト、タトフルニモノナシ。

バクテリヤハ、フツト、外界ノ事情ノ、モットモ、繁殖ニ適スルトキハ、オヨソ二十分乃至三十分ゴトニ、一回ノ分裂ヲナスモノナレドモ、イマ、一時間ゴトニ、一回ノ分裂ヲナスモノト假定スレバ、一箇ノバクテリヤハ、一時間ノ後ニハ、二箇トナリ、二時間ノ後ニハ、四箇トナリ、三時間ノ後ニハ、八箇トナリ、一晝夜ノ後ニハ、千六百七十七萬

七千二百十六箇ノ巨數トナル。カクテ、五日ノ後ニイタレバ、ホトンド、計算スルコトアタハザルホドノ數ニ達シテ、ソノ容積ハ地球上ノ大洋ヲモ、全ク充實スルニイタルベシ。サレド、實際ニハ、カ、ル大繁殖ヲナス餘地ナク、マタ、營養分モ、コレニトモナハザレバ、ツヒニハ、ソノ分裂ヲ止ムルニイタルモノナリ。

バクテリアヤハ、普通ノ植物ノゴトキ方法ニテ、ミヅカラ、營養分ヲトルコトアタハザレバ、カナラズ、他物ニ寄生ス。ソノ人體ニ寄生スルモノ、中ニハ、ハナハダ恐ルベキモノアリテ、シバく、生命ヲ奪フコトアリ。チフス、コレラ、ジフテリアヤ、ペスト、結核<sup>ケツカク</sup>ナドノ、各種ノ傳染病ハ、ミ

ナ、コノバクテリアノ寄生ニヨリテオコルモノナリ。バ

レラ、ジフテリヤ、ペスト、結核<sup>ケツカク</sup>ナドノ、各種ノ傳染病ハ、三

ナ、コノバクテリヤノ寄生ニヨリテオコルモノナリ。バクテリヤハ、ジツニ人類ノ勁敵<sup>ケイテキ</sup>ナリトイフベシ。

サレバ、ワレラハ、ツネニ、ソノ豫防ヲ怠ルベカラズ。石炭<sup>セキタン</sup>酸水<sup>サンスイ</sup>、石灰ナドハ、ミナ、ヨキ消毒劑<sup>シヨドクザイ</sup>ナレバ、不潔ノ場所ニ

撒布シテ、コレヲ滅スベシ。マタ、衣服、家屋、庭園ナドハ清潔ニシ、飲食物ハ、ナルベク、一度煮沸シタル後ニ用ヒテ、ソノ寄生ヲ防グベシ。コトニ、バクテリヤハ、健全ナル身體ニ入りテハ、繁殖スルコトアタハズシテ死滅スレドモ、虚弱ナル身體ニ入りテハ、盛ニ繁殖シテ、大害ヲナスガユエニ、ワレラハ、マヅ、身體ヲ健全ニシテ、ソノ暴威ヲタクマシウスル餘地ナカラシムベキナリ。

サレド、バクテリアハ、ソノ種類ハナハダ多クシテ、ソノ各種ノモノ、コトゴトク、人種<sup>種類</sup>ニ、害ヲナスニハアラズ。サラニ、人類ニ、害ヲナサザルモノモアリ。マタ、カヘテ、人類ニ、益ヲナスモノモスクナカラズ。アルモノハ、酢<sup>ス</sup>、醬油<sup>シウユ</sup>、味噌<sup>ソウ</sup>、納豆<sup>ナット</sup>ナドノ、食用品ヲツクリ、アルモノハ、地中ニアリテ、植物ノ生育ヲ助ク。

マタ、物ノ腐敗スルコトモ、アルバクテリアノ繁殖スルガタメニシテ、ワレラ、人類ノ不利益トナルコト多ケレドモ、モシ、世ニ、コノ、腐敗トイフコトナカリセバ、ハタシテ、イカナル結果ヲカ見ルベキ。太古ヨリ今日ニイタルマデ、死ニ、死ニタル動植物ハ、地球上到ル所ニ堆積シ

テ、ソノ有様、マコトニ慘<sup>サン</sup>憺<sup>タン</sup>タルモノアラシ。シカルニ、バ

マデ、死ニ、死ニタル動植物ハ、地球上到ル所ニ堆積シ

テ、ソノ有様、マコトニ慘憺<sup>サンタン</sup>タルモノアラシ。シカルニ、バクテリアノ、コレラ、動植物ヲ、死ヌルニシタガヒテ腐敗セシムルガタメニ、幸ニ、カ、ル結果ヲ見ザルヲウルナリ。

第十一課 子どもの看病。(一)

ある、雨の降る朝、みなりのわるい、しかし、たいそーかはいらしい子どもが、雨にぬれ、はねをあげて、門司の、ある病院の受付にたづねて来た。この子どもは、近所の村から、わぎく、入院中の父をたづねて来たのである。その父といふのは、數年前から、はわいに、出稼に行つてゐて、この頃、やうく歸國したのであるが、この地に着く

やいなや、病氣にかかつて、こゝに入院したのである。父は、病氣ながら、とりあへず、故郷の妻に、この市に着いたこと、病氣にかかつて入院したこと、を知らせてや、た。妻は、このしらせを見て、非常に心配して、「すぐにも行って見たい。」と思、たが、病氣の子どもがあ、て、なにぶん、手がはなせない、ので、長男に、よくくく、いひふくめて、父の看病によこした、のである。

受付は、取次人を呼んで、子どもを、父の病室に案内させた。病室は薄暗い、陰氣な、薬くさい、大きな部屋である。二列にならんである寝臺には、どれにも、あをじろい、衰弱した病人が寝てゐて、死んだものゝよゝに、目を閉ぢて

あるものもあれば、目をすゑて、天井をにらんでゐるも

した病人が寝てゐて、死んだものゝよゝに、目を閉ぢて  
ゐるものもあれば、目をすゑて、天井をにらんでゐるも  
のもある。うん／＼うなつてゐるものもあれば、足をばた  
ばたさせ、てゐるものもある。取次人は、病室の片隅の方  
をゆびぎして、「あそこにいらしゐるのがあなたのおとら  
きんです。」といつてたちきつた。

子どもは、ゆびぎされた病人の所に行つて、一目見るやい  
なや、はらくと、涙を落した。病人は、しばらく、横目で、子  
どもを見つめてゐたが、ものを、一言いはうともしない。  
子どもは、ちつと見て、その様子のかはつてゐるのに驚いた。  
白髪は生え、鬚はのび、頬はこけ、目はくぼんで、父の、以前  
のおもかげは、まるであらうせしてしまつてゐる。

「おとうさん。私です。今、うちから来たのです。おかあさんがおいでなされるのでしたけれど、弟が病気で、手がはなせないから、私が来たのです。おとうさん。忘れてしまったのですか。なぜだまってるら、しるのですか。」

子どもは、かういひながら、病人の顔をのぞきこんだ。病人は、ちよと見たばかりで、すぐ、目を閉ぢてしまった。

「おとうさん。どうしたのです。私です。良吉です。」

良吉は、また、かういったけれども、病人は身動きへせず、ただ、苦しきうな呼吸をつづけてゐる。

良吉は、涙ぐんで、椅子に、腰をかけて目もはなさず、父の顔を見つめてゐる。ゐるうちにも、考は、あれからこれへ

とうつてくる。をと、し先月、父に別れたこと、留守の



顔を見つめてゐる。ゐるうちにも、考は、あれからこれへ

とうつてくる。をと、しの先月、父に別れたこと、留守の間はきびしいが、歸つていらしたらくらしむきが樂になるだらう。」と、母のいつてゐたこと、こゝに着くやいなや、病院にはいたといふしらせが來たので、たいそ、母がなげいたことから、つひには、父の死後のことにうつてきて、もし、父が死んだら、どんなに、母がなげくであらうといふことまで、心細いことばかり考へてゐたが、ふと、人の聲がしたので、ふりかへて見た。

見ると、醫師が、看護婦をつれて、一々、病人を診察しながらみまはしてゐる。しまひに、良吉の父の番になつた。醫師は、良吉を見て、「この子はどうした子だ。」とたづねた。看護婦

が「この病人の子どもださうで。」と答へると、「さうか。」とい  
て、診察にとりかかった。そして、脈をみたり、病人の胸を打  
てみたりして、看護婦になにかさゝやいて、たちきさらう  
とした。

良吉は、おそるく、醫師に「おとうさんの病氣はなほり  
ませうか。」とたづねた。醫師は「ずいぶん重症じゅうしやうだが、なほら  
ないことはあるまい。あまり心配せんがよい。」といつて出  
ていった。

良吉は、これから、いっしょにけんめいに父の看病をした。掛  
蒲團ぶとんをなほしたり、手足をさすったり、看護婦が薬を持って  
來ると、手傳つてのませたりして、いっしょにけんめいに看病

をした。病人は、ときどき、良吉の顔を見る。しかし、べつに、

來ると、手傳つてのませたりして、いっしょけんめいに看病

をした。病人は、ときどき、良吉の顔を見る。しかし、べつに、喜ぶ様子もない。良吉が涙ぐんでゐるときには、いかにも解<sup>げ</sup>せないよゝな顔つきで見つめてゐる。

その日は暮れた。その夜、良吉は、父のそばにねた。明けると、また、きのふのよゝに、父の看病をした。今日は、病人も、すこしは元氣づいたよゝである。良吉が、なにかいひかけると、口のあたりに、うれしきうなゑみをたゝへて、ものをいひたさうに、唇を動かす。ことに、夕方、薬をのませたときには、すこし笑つたよゝであつた。良吉は、喜んで、いろいろのことを話した。たぶん、聞き取ることはできまいが、じぶんの聲の調子<sup>ちよし</sup>だけでもわかってくれたら。」と思つた

ので。

第十二課 子どもの看病。(二)

かういふふーで、二日めはすぎた。また、三日めも、四日めも。しかし、五日めになつて、病人は、とつぜん、危篤きとくにおちいた。醫師は來たが、ただ、こくびを傾けてゐる。良吉がなにを問うても、答もしない。良吉は、椅子の上に、顔をふせて、しく／＼泣き出した。しかし、悲しい中にもうれしいことは、病人が、危篤におちいりながらも、いくらか、ものゝみさかひのつくよーになつたことである。病人は、つくづく、と、良吉を見つめ、薬も、水も、もう、良吉の手からでなければ、のまない。そして、しきりに、唇を動かして、なにかい

はうとする。

れはのまない。そして、しきりに唇を動かしてなにかい

はうとする。

その日の午後四時頃、良吉は、病人の様子が、どうもよくないのので、いろくくと世話をしてゐると、入口の方で、「みなさん、どうもながく、お世話になりました。」といふ聲が聞えた。どこか聞きおぼえがあるので、思はず、ふりむいて見た。ところが、人が、看護婦と、病室にはいてゐる。良吉は、「あ。」と叫んで、そのまま、そこにつつ立った。その人も、ふりむいて、きくと、良吉の顔を見てゐたが、「あ。良吉ではないか。」と、いってかけよつた。良吉は、父の腕に、しかと抱きついた。看護婦は様子を知らないのので、ただ、あけにとられてゐる。

父は、しばらく、病人の方を見てゐたが、むきなほつて、

「おー。良吉。どうしたのだ。どうして、こゝに居るのだ。二  
三日前の、おかあさんの手紙に、おまへをよこすと書  
いてあつたから『今日か。明日か。』と待つてゐたが、來ない  
ので『どうしたのか。』と心配してゐたのだ。おまへ  
は、いつ來たのだ。どうして、こゝに居るのだ。おかあさ  
んはどうした。弟はどうした。わたしの病氣は、思はず  
早くなほつたので、今退院するところだ。」  
と、いった。良吉は、いろく、話したいことはあるけれど、あ  
まりのうれしさに、ことばも出ない。  
父は「さー。來い。とにかく、うちへ歸らう。」と、いって、良吉の手

父はきー來いとにかくうちへ歸らう」といって、良吉の手

をとった。しかし、良吉は、病人の方を見かへて、もじくす  
るので、「おい。どうした。歸らないのか。」と、手を引いた。  
良吉は、まだ、病人の方を見てゐる。病人は、のこりをしき  
うな様子で、ちと、良吉の顔を見てゐる。良吉は

「おとうさん。私は歸れません。歸ると、あの人がかはい  
さうです。私は、『おとうさんだ。』と、思って、五日の間、看病を  
してあげました。あの人は私を慕つてゐます。私の手か  
らでなければ、薬も、水ものみません。ごらんなきい。ち  
と、私を見てゐます。それに、今は、たいそーわるうござ  
います。もすこし、看病をさせてください。」

と、いった。看護婦たちは、「感心な子どもです。ねー。」と、きこや

きあった。

父は、當惑して、良吉の顔を見つめてゐたが、やがて、看護婦に「いったい、あの人はどうした人です。」とたづねた。看護婦は

「田舎みなかの人ださうです。あなたは「はわいから。」とおっしゃいました。が、あの人は、臺灣から着くと、すぐ入院したのです。入院した日はあなたと同じ日だった。」と思ひます。こゝに來ましたときには、もう、正體もなくて、一言もいふことができませんでした。きっと、家族は、遠い所にあるのでせう。このお子さんを『じぶんの子どもが來たのだ。』と思つてゐるのでせう。」



といた。病人は、まだ、良吉の顔を見つめてゐる。父は、とー  
とー思ひひきつて、「それでは、残つて、看病をしてあげよ。」といつて  
出て行つた。

良吉は、父を送つて、病人のそばに歸つて來た。病人は、さきも安  
心したよーな様子であつた。良吉は、もう泣きはしなかつた  
が、前とかはらず、いっしょけんめいに看病をした。しかし、  
病氣は、ますますくゝわるくなつてきた。その夜、診察に來た醫  
師も「もう、今夜中はもつまい。」といふ。良吉は、夜一夜、まん  
じりともせず、看病をしたが、はたして、六日めの夜明頃、  
病人は、かすかな目をあけて、良吉の顔をながめながら、  
息をひきとつた。良吉は「わ。」と泣きふした。

看護婦は「良吉さん。もう泣いたって、しよーがありません。早く、おとうさんの所へお歸りなさい。親切に、よく看病をしておあげなさいました。」といった。やがて、良吉は起きあがったが、涙ぐんだ目を、寢臺の方へ送って、「をぢさん。しよーなら。」と、ふりかへりくく出て行つた。夜は、全く明けはなれて、波止場はとばの方に當つて、汽船の汽笛が、うなるよーに聞えた。

第十三課 鐵砲の傳來。

ころは天文十二年、ぼるとがるの船、一艘、大隅の國種子たねが島の、西村といふ浦に來着せり。乗組の人、百餘人、容貌、衣服の、いたく異なりたるに、言語も、さらに通ぜざりしか。

ば、村の人々は、ただ怪みまどふのみなりき。  
しかるに、その中に、五峯ごほうといふ支那人ありけり。わが國  
人に、言語も、文字も通ずまじければとて伴ひ來れるな  
り。村の長、織部丞おりべのじょうといふものこれに向ひ、つきたる杖に  
て、砂の上に、「いづこの人の、何用ありて來れるにか。」と、漢  
文にて書きたるに、五峯も、また、漢文にて、「これは、はるか  
西南に當れる國の人の、商せんとして來れるなり。」と書き  
たり。織部丞、すなはち、「さくらば、こゝより十三里ばかりの  
所に、赤尾木あかをぎといふ港あり。商業盛にして、碇泊にも便な  
れば、船をかしこに寄すべし。」と教へて、ただちに、このよ  
しを、島主、種子島たねがしま時堯ときたかのもとに告げたり。

船の赤尾木あかをぎに着きたる後、船長二人、おのく、手に異様なる物を携へて上陸せり。長さ二三尺、鐵にて作り、眞直にして、中通り、底塞りて、底に近く、小さき穴あり。二人は、濱邊に、方形のま的とをたて、その物に黒き藥と、小さき鉛のたまとを入れて身構し、左眼を閉ぢて、的をねらひ、かの小さき穴より、火を通ずるに、たちまち、烈しき物音する。とともに、たまは飛んで、的にあたりぬ。かくすること數十度、いまだ、一度もあやまたず。時堯ときたか見て、きはめて珍しき物に思ひ、その技を學びてこゝろみるに、的にはあらざれども、また遠からず。大いに喜びて、價を惜まずして、二箇を購ひ、篠川ささかは小四郎といふけらいをして、その藥

の製法を學ばしめたり。これ、鐵砲、火藥の、わが國に傳來

の製法を學ばしめたり。これ、鐵砲、火藥の、わが國に傳來せる始なり。

きて、時堯ときたかは、鍛冶かぢ匠しやうを集めて、その購ひたる鐵砲に倣ひて造らんとせしが、筒の底を塞ぐ術を知らざりければ、そのまゝにてやみけり。しかるに、翌年、ぼるとがるの商船、また、この島に來れり。そのうちに、鐵砲を製する鍛冶匠、一人乗りこみたりしかば、清定きよさだといふものをして、くはしく、その製法を學ばしめ、つひに、あまたの鐵砲を造り出すをうるにいたれり。

これより、鐵砲、やうやく、内地に傳はりたるが、古來の武器の、遠くおよばざる利器なれば、武士は、われもくくと、

争うて、これをもとめたり。かくて、鐵砲の傳來せし後三十餘年、かの長篠ながしのの役のありしときには、織田、徳川の軍勢、すでに、三千の鐵砲を用ひたりといふ。

また、長篠ながしのの役のありし翌年には、大砲はじめて、肥後の國に傳はれり。その勢、きはめて猛烈にして、いかなる金城、鐵壁たりとも、ために碎けずといふことなし。領主、大友宗麟ともそりんこれを得て、喜ぶこと限なく、國崩くにくづしと名づけて、大いに珍重したりき。

これより後、古來の武器は、しだいにすたれて、つひに、鐵砲、大砲は、武器の主要なるものとなるにいたれり。

第十四課 不正直なる商人の話 (一)

正直は商人の守るべき、第一の徳義なるに、やゝもすれ

第十四課 不正直なる商人の話。(一)

正直は商人の守るべき、第一の徳義なるに、やゝもすれば、不正なる手段を用ひて、不當なる利をむきぼらんとするものあり。まことに歎かはしきことなり。

昔、あめりか土人の、いまだ、白人と交際せざりしころは、土人は、狩をなすに、弓、矢、または、槍やりの類を用ひたりしが、白人の、一たび、鐵砲を傳へてよりは、争うて、これを用ふるにいたり、したがって、火薬を要すること、はなはだ多くして、白人の、土人と物品を交換するには、かならず、火薬をも携へ行くを例とするにいたれり。

ある時、一人の白人あり。例のごとく、他の物品とともに、多量の火薬を携へ、土人の住める村に到りて、土人の有

する毛皮革けいしやくなどと交換せんことをもとめたり。しかるに、土人は、白人の携へ來れる織物、帽子ぼうしのごとき、他の物品とは交換しけれども、「火薬は、以前交換したるが、なほ、大いに残りたれば。」とて、さまざまにすゝむれども、交換することを承諾せず。されど、商人は、そのまゝ、多量の火薬を持ち歸らんことの厭はしければ、いかにもして交換せしめんと思ひ定めぬ。

翌日、商人は、ほど近き廣野に行き、豊饒ほうじょうなる土地を選びて、あまたの、小さき穴をうがち、その穴に、火薬に葱ねぎの種子を交へて下しゐたり。

土人らは、これを見て、大いに怪みたりしが、やがて、一人

は「なんぢは何をするぞ。」と問ふ。「火薬をまくなり。」と答ふ。



土人らは、これを見て、大いに怪みたりしが、やがて、一人

は「なんぢは何をするぞ。」と問ふ。「火薬をまくなり。」と答ふ。他の一人は「何がゆゑに、火薬をまくぞ。」と問ふ。「火薬を收穫せんと思へばなり。まかで、いかでか收穫することをうべき。なんぢは、いかにして、穀物を收穫するぞ。」といふ。土人ら、これを聞きて、大いに驚き、異口同音に「しからば、火薬も、穀物のごとく發生し、成長するものなりや。」と問ふ。商人は、きはめてまことしやかに「しかり。無論なり。いまだ、それを知らざりしか。なんぢらわが火薬を望まざるがゆゑに、かくまきて收穫し、これを、くろーすに賣らんとするなり。」と答へたり。くろーすとは、あめりか土人の一種族にして、この村の種族とは、つねに、争鬭そいどいをこと

とせるなり。

されば、土人らは、多量の火薬の敵の手にわたらんことをおそれて、「よし。く。なんぢのいへるがごとく、はたして、火薬の收穫せらるゝものならば、われらは、なんぢの携へたる火薬を、ことごとく引き受くべし。」といふ。されど、一人は「火薬の成長するか否かをたしかめたる後にしたし。」といへば、商人これを承諾したり。

第十五課 不正直なる商人の話。

(二)

一週間ばかりへて、ききにまきたる葱ねぎの種子は、地上に、芽を出したり。商人、すなはち、土人を伴ひ行き、その芽の出でたるを示し、かば、土人も、つひに、商人の言を信

じ、約束にしたがひて、商人の携へたる火薬を、ことごと

の出でたるを示し、かば、土人も、つひに、商人の言を信

じ、約束にしたがひて、商人の携へたる火薬を、ことごとく引き受けたり。商人は、葱の種子の交れる、多量の火薬を、きはめて多数の毛皮、革なめしがはなどと交換しえたれば、「今は用なし。」とて、いそぎ、この村を去りたり。

これより、土人は、穀物の收穫には、いきゝかも注意することなく、ただ、火薬の收穫をのみ待ちて、日々、その成長に注意し、かつ、收穫の後には、水牛すいぎゅう狩がりを催きさんなど、種々の希望をきへ思ひ浮べて、心樂しく、日を送りたり。

やがて、葱ねぎは多くの實をむすびたり。土人は、まことの火薬と思ひければ、喜び勇みて收穫したり。

その後、土人は、その欺かれたることを悟りたれども、い

かにともせんよりのあらざりければ、ただ、齒がみして、くちをしく思ふのみなりき。

かの商人は、もとより、ふたゝび、この村に足を入れざりしが、ほどへて、その仲間をすゝめて、この村に來らしめたり。土人は、この商人の、さきの商人と同じ仲間なることを悟りたれども、欺かれたることにつきては、一言も語らず、やがて、品物をならぶるを待ちて、ことごとく、これを奪ひ取り、さりげなきかほして歩み去りたり。

商人は、しさいありとも知らざれば、あまりのことに、大いに怒りて、ただちに、會長シヤウチヤウのもとに行きて訴ふるよし、「われは正直なる商人なり。正直に商せんとして來れり。し

かるに、この村の人は盜賊なり。わが携へ來れる物品を、

「われは正直なる商人なり。正直に商せんとて來れり。し

かるに、この村の人は盜賊なり。わが携へ來れる物品を、  
ことごとく盜み去れり。」と訴へたり。

會長は、しばし黙して、きて、いふよ、「わが人民は正直な  
り。みだりに、他人の物品を盜み去るがごときことはせ  
じ。もし、火藥を收穫することをえしめば、ただちに、代價  
を拂ふべし。」といひたり。

商人は、かねてより、しばく、かゝる手段を用ひて、土人  
を欺きしものあるを聞きたりしが、わが仲間もその一  
人なることを知りて、大いに恥ぢ、つひに、一言の返すこ  
とばもなくて、ただちに、本國に歸れり。かくて、さきの商  
人にあて、一書を認め、

「君は、わづかの利をえんがために、土人を欺きたり。われは、そのために、思はぬ損をかうむり、また、大いなる恥辱を受けたり。われは、不正直なる人とともに、事をなすを好まず。今より、君と絶交すべし。ただ一言残したきは、『正直は商人の守るべき、第一の徳義なり。』といふことなり。」  
といひおくりたりきとぞ。

第十六課 資本。

資本ハモトデトモイヒ、ワレラガ職業ヲ營ムニ缺クベカラザルモノナリ。農夫ノ耕作ニ用フル農具、家畜、種子、肥料、大工ノ工作ニ用フル道具、商人ノ店ニ陳列スル商

品、周圍ノ裝飾品ナド、ミナ資本ナリ。マタ、業ヲ營ム間ニ

肥料大工ノ工作ニ用フル道具、商人ノ店ニ陳列スル商

品、ソーシヨク周圍ノ裝飾品ナド、ミナ資本ナリ。マタ、業ヲ營ム間ニ要スル衣、食、住モ資本トイヒウベシ。スナハチ、資本トナルベキモノハ、ソノ種類、ハナハダ多クシテ、カナラズシモ、貨幣ノミニアラズ。世ニ、貨幣ノミヲモッテ、資本トオモフモノアルハ、諸物ノ、貨幣ト交換セラル、ヨリ生ジタル誤解ナリ。

カクノゴトク、資本トナルベキモノハ、ソノ種類、ハナハダ多クレドモ、資本トナルベキモノモ、ソノ使用ノ目的ニヨリテハ、スコシモ、資本トナラザルコトアリ。タトヘバ、馬ハ、コレヲ耕作、ウシ運搬ナドニ使用スルトキハ、資本トナレドモ、ケイ競馬ノゴトキ娛樂ノタメニ使用スルトキハ、

資本トナラザルガゴトシ。コレト同ジク、貨幣モ、木材、商  
品ナドノ購入ニ使用スルトキハ、資本トナレドモ、物見  
遊山ノゴトキ遊興<sup>ユキキョウ</sup>ノ費用ニ使用スルトキハ、資本トナ  
ラザルナリ。サレバ、資本トナスタメニハ、カナラズ、職業  
ヲ營ムガタメニ使用セザルベカラズ。

資本ニハ、タダ一回ノ使用ニヨリテ、全ク消費セララル、  
モノアリ。コレヲ流動資本トイフ。農夫ノ、田畑ニマク種  
子、牛馬ニ與フル飼料、工業者ノ、蒸氣力ヲ發動セシムル  
ニ用フル石炭、木綿糸ヲ製造スルニ用フル綿ナド、コレ  
ナリ。コレニ反シテ、ゼンジニ減損スレドモ、ナホ、幾回モ  
使用シウベキモノアリ。コレヲ固定資本トイフ。農夫ノ

使用スル農具、家畜、工業者ノ使用スル工場、機械ナド、コ



使用シウベキモノアリ。コレヲ固定資本トイフ。農夫ノ

使用スル農具、家畜、工業者ノ使用スル工場、機械ナド、コレナリ。

固定資本ト流動資本トハ、タガヒニ、相當ノ割合ヲ保タシメザルベカラズ。シカラズバ、カナラズ、損失ヲ生ズベシ。タトヘバ、コ、ニ、綿糸工場アリ。多量ノ綿ヲ買ヒ入ルトモ、規模コレニ伴ハザルトキハ、ナガク、綿ヲネサセオカザルベカラズ、マタ、規模、イカニ大ナリトモ、コレニ相當スル綿ヲ買ヒ入レザルトキハ、イタヅラニ、機械ヲアソバセオカザルベカラズシテ、損失ヲ生ズルヲ免レザルガゴトシ。

スベテ、資本ハ、ワレラノ職業ヲ營ムニ缺クベカラザル

モノナルガユエニ、マス／＼、コレヲ増加セシムトラツ  
トメザルベカラズ。コレヲ増加スルニハ、貯蓄ニヨルニ  
シクハナシ。貯蓄トハ、貨財ノ使用ヲ節シテ、未來ノ必要  
ニ供スルヲイフ。サレド、イカニ貯蓄セントスレバトテ、  
貨財ノ餘裕アルニアラズバ、貯蓄スルヨシナカルベケ  
レバ、ワレラハ、平素、勤勉ト節儉トヲ旨トシテ、大イニ、ソ  
ノ餘裕ヲツクラザルベカラズ。

第十七課

松居遊軒

近江は、徳川氏幕府を開きし後、數藩の領地に分れて、租  
税重く、夫役きびしかりしかば、民農を營むにたへず、お  
のおの鋤鋤をすて、商に歸し、天秤棒を肩にかつぎて、

ぞく／＼、諸國に行商するにいたれり。世に、これを近江

如シ  
タハ

のおの、鋤、鍬をすて、商に歸し、天秤棒を肩にかつぎて、

ぞくぞく、諸國に行商するにいたれり。世に、これを近江商人といふ。松居遊軒は近江商人の一人なり。

遊軒は神崎郡龍田村の人なり。はじめ、久三郎といへり。幼より、父にしたがひて、木綿、生糸などを、諸國に行商し

たりしが、父の業をつぐにおよび、ますく、てびろく行商せり。人となり、實直にして、きはめて勤儉なりければ、

つひには、巨萬の富を有するにいたれり。

遊軒の屋號を星久といふ。斜線の上下に、丸星を書ける

もの(☉)を符號とせり。斜線は天秤棒にかたどり、上下の

丸星は星にかたどれるものにして、朝は星のあるうちより、夕べは星のかがやくころまで、日々、天秤棒を肩に

マジメ

かつぎながら、旅より旅に行商したるとききの記念とせ  
るなり。

遊軒は、家富み榮えたれども、勤儉貯蓄の心深くして、い  
きゝかも奢ることなかりき。家にあるときは、つねに、手  
織木綿の着物を着、祝祭などにて外出するときにも、た  
だ、その新しきものを着るにすぎず、また、みだりに、美食  
するがごときことなかりき。したがって、その商業の方法  
も、はなはだ着實にして、投機に似たることは、いさゝか、こ  
れを避けたり。

遊軒は、かく、節儉を旨としたりしかば、中には、吝嗇家な  
りと嘲り笑ふものありき。されど、遊軒は、吝嗇家にはあ

らず、人の貧困に苦むものあれば、財を惜まらずして、これ

マジン  
アブサ  
ミナアル  
仕事

カタミ

りと嘲り笑ふものありき。されど遊軒は吝嗇家にはあ  
らず、人の貧困に苦むものあれば、財を惜まらずして、これ  
を救ひ、租税を納めえずして歎くものあれば、金を與へ  
て、將來を戒むるなど、慈善の心、きはめて深かりき。され  
ば、さきに嘲り笑ひし人々も、しだいに、その徳行を稱す  
るにいたれり。

遊軒の徳行、かくのごとく高かりければ、領主、井伊直弼、  
聞きて、大いに感歎し、遊軒を招き寄せて、多くの褒賞を  
與へ、また、終身、祿をも給したり。

遊軒は、安政二年、八十六歳にて死せしが、後、村民、あひは  
かりて、碑を、その村の青林寺に建て、ながく、その徳行を  
表彰せり。

第十八課 琵琶湖

近江には琵琶湖とて、

その名高き湖水あり。

清らかなるは水の色、

見れどあかぬは八つの景」

夕日きす勢田の川、

わたる汽車もこゝちよく、

栗津の松の色はえて、

晴れたる空ののどけきよ。」

石山の秋の月、

雲をさまりて影清し。

冬の來りてさく花は、

雲をさまりて、影清し。

冬の來りてさく花は、

比良のたかねの暮の雪。」

唐崎の一つ松、

夜の雨に、名をえたり。

堅田の浦の浮御堂、

落ち來る雁のながめあり。」

三つ、五つうちつれて、

波の上を歸り行く、

矢走の沖の舟人は、

聞きしか、三井の晩鐘を。」

第十九課

琵琶湖疏水。

琵琶湖疏水は、さきの京都府知事、北垣國道の計畫、實行せしものなり。明治十四年、はじめて、水路を實測し、爾後、百千の障礙を排して起工し、明治二十三年、やうやく、これを竣功せり。

疏水は、その水口、大津市の西北、三保崎にあり。それより、三井寺の麓にいたり、第一とんねるに入る。長さ二十二町二十間、高く、竪穴をうがちて、内部の通氣と、採光とをはかれり。第一とんねるを出づれば、水路、しばく、屈曲して、さらに、第二、第三の兩とんねるに入る。かくて、京都市の東部にある、蹴上の水溜に出で、南禪寺の附近に到りて、水路、二つに分る。一は、ただちに、西に向ひて、賀茂川

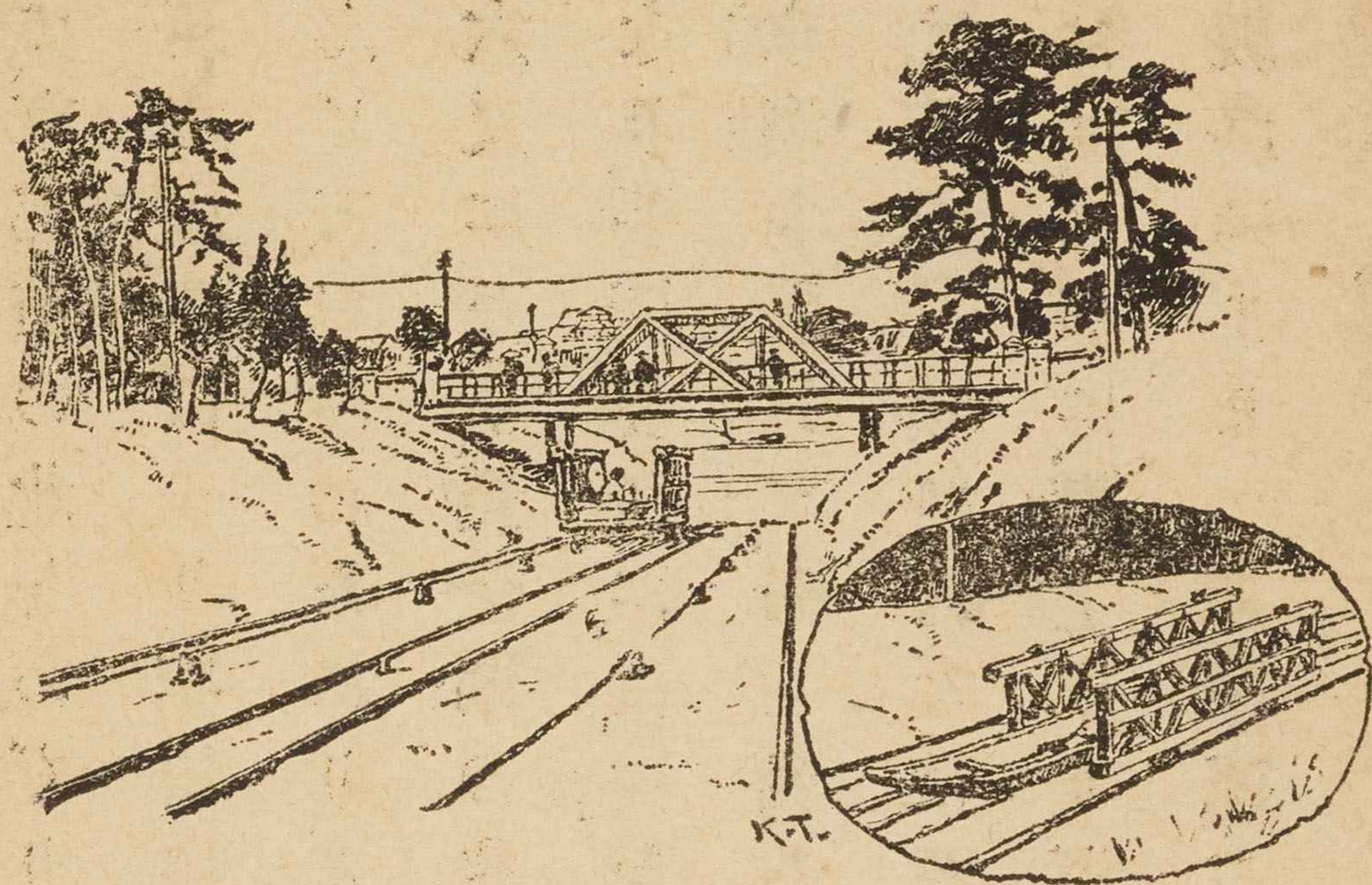
の新運河に接續し、他は、遠く、北に進み、さらに、西に轉じ



りて、水路二つに分る。一は、ただちに、西に向ひて、賀茂川

の新運河に接續し、他は、遠く、北に進み、さらに、西に轉じて、京都市の北をめぐりて、堀川の上流に合す。

疏水は、水口より、堀川に合するにいたるまで、延長、ほとんど五里にわたれり。その間、廣き所は十間餘、深き所は六尺に及び、琵琶湖の水、たえず流れて、水勢、すこぶる盛なり。要所要所には、堰むせきを設けて、舟を通ずるに便し、また、水溜みづためを設けて、舟を留むるに便せり。されど、南禪寺附近は、土地の傾斜、はなはだ急にして、堰もその用をなさざれば、べつに、蹴上けあげより下方の水溜まで、ただちに、普通の坂路によりて、舟を運ぶ装置あり。これをいんくらしいんといふ。



き水面にある舟は低き水面に運ばる。臺の鐵索を引く

いんくらいんは、坂路に、れゝる  
を敷けるものにして、長さ、およ  
そ五町二十間あり。舟を運ばん  
とするには、これを車輪附の臺  
に載す。かくするときは、臺に結  
びつけたる鐵索、電氣の力によ  
りて引かれて、臺は、おのづから、  
れゝるの上を進行するなり。か  
くのごとくにして、低き水面に  
ある舟は、高き水面に運ばれ、高

に用ふる電氣はいんくらいんのかたはらにある發電

き水面にある舟は低き水面に運ばる。臺の鐵索を引く

に用ふる電氣は、いんくらいんのかたはらにある發電所にて、疏水モスイの水の壓力アツクを利用して發電するものなり。』京都市は、この疏水モスイの開通してより、大いに、運輸ウンの便をえ、また、かの發電所にて發電せる電氣を應用して、電氣燈を設け、電車を通じ、紡績業を盛にし、種々の製造業をもおこすをうるにいたれり。

### 第二十課 スエズ運河。

スエズ運河ハ紅海ト地中海トノ間ヲ隔ツル地峽ヲ開鑿サクセルモノナリ。アルヒハ、土地ヲ掘リ割リ、アルヒハ、山脈ヲ切り通シテ、四箇ノ天然湖ヲツラネテ、南ハ、スエズ灣ヨリ、北ハポートサイド港ニイタリ、延長、オヨソ百マ

イルニオヨベリ。幅二三百尺、深サ二十六七尺アリテ、吃キツ水深スイキ船艦モ優ニ通過スルコトヲ得。

ソモく、コノ運河ノ開鑿カイサクセラレザリシ以前ハ、東西ノ

交通、ハナハダ不便ニシテ、ヨーロッパヨリ、インド地方ニ

行クニハ、多クハ、陸路ニヨルカ、マタハ、喜望岬キボイヲ迂迴セ

ザルベカラザリシナリ。

シカルニ、フランスノ皇帝、ナポレオン第一世ノエジプ

トヲ征服セシトキ、コノ地峽ヲ開鑿カイサクセンコトヲ企テ、土

木技師ヲシテ測量セシメシニ、紅海ノ水面ノ、地中海ノ

水面ヨリ高キコト三十餘尺ナレバ、開鑿ストモ、ソノ功

ナカルベシ。下ノコトナリシカバ、ツヒニ、着手セズシテ

ヤミタリ。

ナカルベシ。下ノコトナリシカバツヒニ着手セズシテ

ヤミタリ。

ソノ後、フランス人、レセップ、エジプトニ來リシガ、マタ、コ  
ノ地峽ヲ開鑿カイサクスルコトノ、世ニオヨボス效果大ナルベ  
キヲ感ジ、フランスナドノ學者ヲ招キテ、クハシク測量  
セシメシニ、カノ土木技師ノ測量ハ誤ニシテ、兩海ノ水  
面ハ、ホトンド、アヒ平均セルコトヲ知り得タリ。レセップ  
ハ、大イニ喜ビ、スナハチ、十分ナル設計ヲ立テ、ソノ實  
行ヲ、エジプト副王、サイドニ謀リシニ、王モ決心スルト  
コロアリ、イカナル障礙シカイアリトモ、コノ企ヲハタスベシ。  
トイヘリ。

シカルニ、コノ企ニ關シテ、イギリス、大イニ、不同意ヲ唱

ヘシカバ、ヨーイニ、着手スルコトアタハザリシガ、二年  
ノ後、ヤウヤクニシテ、ソノ同意ヲ得タリ。カクテ、ソノ資  
本ヲ集ムルニツキテモ、幾多ノ困難アリシガ、ツヒニ、エ  
ジプトソノ主トナリ、フランスコレヲ助ケ、他ノ諸國モ、  
マタ出金スルコト、ナリテ、レセツプノ志業ハ、ヤウヤク、  
ソノ緒ニツキヌ。

サレド、世ニモマレナル大工事ナレバ、ソノ困難モ、マタ  
ハナハダシカリキ。スナハチ、開鑿ニ着手シテヨリ數年  
ニオヨベドモ、イマダ、ソノ成功ノ端緒ダニアラハレザ  
リシカバ、各國ハ、アルヒハ、ソノ業ノ緩慢ナルヲソシリ、  
アルヒハ、ソノ業ノ成否ヲ疑ヒテヤマズ、マタ、開鑿ノ地、

多クハ沙漠ニシテ、炎暑ヤクガゴトクナレバ、二萬餘ノ

多クハ沙漠ニシテ、炎暑ヤクガゴトクナレバ、二萬餘ノ  
役夫ハ、日夜、勞苦ヲ訴ヘテヤマザリキ。カツ、ハジメノホ  
ドハ、飲料水ヲ運ブニ、日々、千六百頭ノ駱駝ラクダヲ使役スル  
ホドナリシカバ、費用、意外ニカサミテ、ツヒニ、資本ノ不  
足ヲモ生ズルニイタレリ。レセップノ心勞、マコトニイハ  
ンカタナカリキ。

サレド、レセップハ、ヨク、コレラノ困難ニタヘ、イヨク、勉  
勵シテ、工事ヲ監督シ、業務ヲツトメテ、チャク、歩ヲ進  
メタリシカバ、サキノ非難ノ聲モ、シダイニ減ジ、資本モ、  
ヤウヤク集リテ、サシモノ大業モ、ツヒニ成就ジョウジスルニイ  
タレリ。時ハ、今ヨリ三十餘年前ナリ。

サテ、レセ、プノコノ工事ニ着手シテヨリ、年ハ、オヨソ十  
 箇年ヲ要シ、費用ハ、スベテ一億六千萬圓ニ達シタリト  
 イフ。ソノ事業ノ、イカニ大ナルカラオモフベシ。シカシ  
 テ、コノ運河ノ開通シテヨリ、從來、喜<sup>キ</sup>望<sup>ボ</sup>岬<sup>ク</sup>ヲ迂迴シタル  
 ニ比シテ、大イニ、航路ヲ減ジタレバ、船舶ノ、コノ運河ヲ  
 通過スルモノ、年一年ト増加シ、開通ノ翌年ニハ、四百八  
 十餘艘ニスギザリシモノ、ソノ後、二十五年ヲヘテハ、三  
 千四百三十餘艘ノ多キニノボリ、ナホ、年ヲ追ウテ増加  
 セリ。東西ノ交通ノ、イカニ盛ニナレルカラ察スベシ。

十日三月  
 をはり。



72434

国立国語研究所



1000605350

發行所

明治三十七年二月五日  
文部省檢査濟

著作權所有

明治三十六年十二月廿五日 印刷  
明治三十七年二月廿七日 發行  
明治三十七年二月五日 翻刻印刷  
明治三十七年二月八日 翻刻發行

著作兼  
發行所

翻刻  
發行所

印刷者

印刷所

高等小學讀本七

定價 金八錢五厘

文部省

細川芳之助

東京市京橋區銀座三丁目一番地

大橋光吉

東京市小石川區久堅町百八番地

合資會社 博進社

東京市小石川區久堅町百八番地

東京市日本橋區新右衛門町拾六番地

日本書籍株式會社

0  
24